

児童養護施設における養育困難児童への 対処に関する研究

—レジデンシャル・マップの活用と愛着臨床アプローチ(CAA)を通して—

藤岡 孝志

Research on treatment to children with some difficulties and application of The Residential Map in Child Welfare Facilities.

— Development of Clinical Attachment Approach —

Takashi Fujioka

Abstract: In this study the author discussed about The Residential Map that the author developed about the actions and human relations of children with some difficulties in Child Welfare Facilities, and discussed a useful possibility for understanding difficulties of those children by this map. In addition, the author discussed about violence and fight among children which become big problems in facilities for children's welfare and violence from children to the staffs. The standpoint of basic human relations between children and staffs is a clinical approach that stands in the viewpoint of Attachment (Clinical Attachment Approach ; CAA).

Attachment, Dissociation, and Automatism were taken up as important concepts, and the mechanism of treatment against attack actions of children was analyzed through invoking these concepts.

Key Words; Children with Some Difficulties, violence among children, The Residential Map, Attachment, Dissociation, Automatism

本研究は、児童養護施設における養育困難児童への対処について、まず、筆者が開発しているレジデンシャル・マップをとりあげ、養育困難児の理解に役立つ可能性について論じる。さらに、それらも踏まえて、現在、児童福祉施設において大きな問題となっている子ども間の暴力、子どもから職員への暴力について取り上げていく。基本的な関わり方は、愛着の観点に立った臨床的なアプローチ (CAA) である。重要な概念として、愛着、解離、自動化を取り上げ、これらの概念を援用しながら、攻撃行動への対処のメカニズムを分析した。
キーワード：養育困難児童、子ども間暴力、レジデンシャル・マップ、愛着、解離、自動化

1 はじめに

子ども虐待への対処が様々なところで試みられている中であって、児童福祉施設、里親家庭、実親との関係性などで、課題となっているのは、養育困難な子ども達への対処である。特に、子ども間暴力、及び子どもから職員あるいは里親への暴力は、子どもがそれ以上、施設や里親家庭に居る事ができなくなるほど、深刻な問題を含んでいる。施設崩壊や園舎崩壊、職員のバーンアウト、さらに、里親の養育不調、里親の燃えつきなどを引き起こしてしまうこともある。これらの問題については、現場の中で様々な試みが行われてきているが、未だ十分に援助技法は確立されているとはいいがたい状況である。ここでは、子ども間暴力、及び職員への暴力に焦点をあてて、そのメカニズムを検討し、あわせて、援助技法、対処方法の理論的な背景と具体的な対処法についての論考を加えていく。最後に、解離や自動化、愛着臨床の概念などを重要な臨床概念として援用し、対処、支援の理論的考察を加えていくこととする。なお、職員から子どもへの暴力は、施設内の子ども虐待として改めて別の機会にふれることにする。

2 子ども間暴力をどう理解するかー子ども間暴力のアセスメントー

まず、子どもの攻撃性、暴力のアセスメントについて考えていく。子どもの暴力の可能性（子ども間暴力）には、以下の5点が考えられる（表1）。これらは、筆者の臨床経験に基づいて整理したものであるが、まだ仮説の域を出ておらず、今後、実証的な研究によって検証されなければならない。

表1 子ども間の暴力の可能性（子ども間暴力）

- 1、特定の子（例 年下の、多動児童）に刺激されて暴力行動が誘発される。
- 2、職員の理解不足やかかわり不足によって、暴力という形での関わりを求める。
- 3、職員の無意識的な「支配―被支配」に対する同じ方法（「支配―被支配」）による反応
- 4、暴力が招く人間関係の崩壊に対する無意識的な「再現傾向」
- 5、施設内以外の理由（例えば、実親との面会后、精神的な不調 など）による攻撃性の源泉

（1）特定の子（例 年下の、多動児童）に刺激されて暴力行動が誘発される

もともとイライラ感があったり、親からの虐待によって、傷つき、深い悲しみや喪失感を感じている子ども達や、自らの攻撃行動が原因で学校や学級での居場所を見出せず、また、教師からも適切な支援を受けられないことによって、不登校状態になり、先行きの見えない苛立ちやつらさ・きつさを抱えている子ども達にとって、職員のいったことをすぐに聞かなかつたり、口ごたえをしたり、反発したりなどの様々な行動を示す年下の子ども達や、発達障害がゆえに、

他者の気持ちを慮ることが苦手で、文脈にはそっていない突然のいたづらをしたりする子ども達と生活を共にすることは、怒りや苛立ちや攻撃性を制御するには困難で、制御の範囲を超えてしまうことがある。結果として、激しい攻撃行動や暴力行動に出ってしまう子どもたちもいる。穏やかに、一人過ごせていれば起きない様々な出来事も、集団生活であるがゆえに起きてくることもある。特定の子が要因となることもあるが、生活環境そのものが、子ども達を落ち着かせなくしている可能性もある。どのような養育を目指しているのかという職員全体の志向性を意識化することが必要と考えられる。

(2) 職員の理解不足やかかわり不足によって、暴力という形での関わりを求める

なかなか自分のことをわかってくれない職員がいたり、子どもより先に職員のほうがすぐに切れてしまうと、子どもの側は、暴力という形で関心を引くことで、関わりを求めることがありうると考えられる。このような職員の行動は、ただ、反発し、接触を避けようとする子どもの行動を誘発することもありうるだろう。

あるいは、子どもの側に立った、関係性を前提としたルール設定を職員のほうが出来ない(職員の都合だけで、ルールを決めてしまう、など)、攻撃性や暴力を引き起こすことで、結果として、職員の関心を引き、職員の関わりを得られることを無意識的に行ってしまう子ども達もいる。

(3) 職員の無意識的な「支配—被支配」に対する同じ方法(「支配—被支配」)による反応

職員の中にある「支配—被支配」への志向性を子どもとの関わりの中で再現してしまうことがある。これは、職員自身が厳しくしつけられ、場合によっては、身体的な攻撃行動によって、有無を言わず親の価値観を押し付けられてきた歴史を有している場合、職員の中で、支配—被支配が当たり前の子育てにおけるよりどころになってしまい、それが、職員と子どもとの関係性の中で再演されてしまうのである。信頼関係の構築という新たな関わりを試みることで、支配—被支配の形成から脱却することが重要となる。

また、効果的なコミュニケーションの方法、ストレスの対処法、感情や葛藤の管理の仕方、問題解決法、そして自分と他人にどのように気遣いするかなどについてモデルを示すことも大事である。支配—被支配の関係性の中にあるのではなく、一緒にいるから楽しい、うれしいという場に関わりの場を変化させていく。重要なのは、その場の雰囲気や最終的に決めるのは子どもだという点である。子どもがどのようにこの場を支配しようとしているのか、ということに注目していく。すると、次第に、その場は、支配から、共有、共生となっていききっかけや子どものニーズが見えてくる。人の実在というリアリティが欠けている場では、どうしても、支配—被支配という幻想的な人間関係が再現されてしまう。また、支配—被支配という場を無意識的に設定してしまっている養育者の前でも、子どもは、容易に、この支配—被支配を再現してしまう。しかし、自分が決めたルールやゲームの内容が楽しいだけでなく、相手がうれしいことがうれしくなると、そこに相互性が生まれてくる。このような相互性を前提とした子ども間の関わりや、職員—子ども間の関わりで、共生関係、あるいは、信頼関係が醸成されてく

ると考えられる。

(4) 暴力が招く人間関係の崩壊に対する無意識的な「再現傾向」

また、既に多くの人によって指摘されているように、暴力が招く人間関係の崩壊に対する無意識的な「再現傾向」がある。これは、「虐待の再現傾向」とも表現される。自己破壊的な攻撃行動といってもよく、育ちの中で、このような、人間関係の崩壊の道筋をストーリーとして描く志向性が高い場合には、気がつかないうちに、このようなストーリーを展開してしまうこともある。

このような「再現傾向」は、様々な考えで説明されている。その一つは、「転移—逆転移」での説明である。子どもの側の転移感情（例えば攻撃的な母親への転移感情）が、養育者の逆転移感情（攻撃的な側面を刺激されてしまう）を引き出し、養育者は、気がつかないうちに、虐待者のイメージをかぶせられ、虐待者と同様の感情状態に陥ってしまうという説明である。これらは、養育者の気付きとしてとても大事であり、そのことで、逆転移感情への気付きが生まれ、養育者の自己調整によって、再現傾向は起きなくてもすむことになる。

(5) 施設内以外の理由（例えば、実親との面会后、精神的な不調など）による攻撃性の源泉

のちのレジデンシャル・マップの説明の中でみるように、子ども間の相互関係だけでなく、子ども自身から攻撃性が発することがある。それは、たとえば、精神的な不調になる場合や実親との面会の後など、誰かから刺激を受けることなく、自分のほうから、攻撃性の発信源となっており、施設内以外の様々な理由を想定しなければならないだろう。

これまで見てきたように、子ども間の攻撃性、暴力には、様々な要因が加わっており、その徴候を早い段階で把握することは、とても大事なことである。何らかのわかりやすい視覚的な表示が出来る援助技法の一環としてのマップが必要となると考えられる。

以下に見るような、子ども同士の関係性を視覚化できる「レジデンシャル・マップ」を活用することが必要なのは、施設の中そのものが、学年を越えて子ども達が学ぶ学級集団と同じような様相を呈するからである。また、たとえ、様々な事情が違って、一緒に暮らすということは、みんなは一つの家族である、という観点に立てば、お互いに対する思いやりや愛情を前提に、行き過ぎた子ども間暴力は起きないかもしれないが、そうでない場合、暴力を誘発するきっかけは、日常生活だからこそ多くの空間・場面に潜在的に隠されている。表1には、子ども間暴力が起きる可能性について整理したものであるが、今後、このような様々な仮説が検討されなければならないであろう。

3 アセスメントの一例—レジデンシャル・マップを通した子ども理解

従来、アセスメントの一つの方法としてマッピングというのがある。特に家族アセスメントにおいては、ファミリー・マップやジェノグラム、家族も含めた社会環境を生態学的に把握するためのエコマップなどがよく知られている。しかし、施設の中での人間関係を表現したマッピング技法は、もっと、工夫されてよいのでよいのではないだろうか。

筆者は、施設内での人間関係を表現したマッピング技法を、「レジデンシャル・マップ」と位置づけて、利用児・者の理解及び、職員との対応を考える上でのヒントにしていくことが大事ではないかと考えている（藤岡、2009）。

(1) レジデンシャル・マップとは

ファミリー・マップは、家族療法・家族ケースワークの中の立場である構造派家族療法の創始者ミニューチンの考え方に基づいてつくられたものである。家族の関係性を表現することで、どこに課題があり、どこに介入することで少しずつ家族が変化していくか、ということを検討する上で、有効な視覚的な表現技法である。これらのことも踏まえ、筆者は、以下のように、定義したい。レジデンシャル・マップとは、システム論的な観点に立って、施設内で一緒に暮らす利用児・者どうし、利用児・者と職員、及び職員どうしのそれぞれの相互の関係性を視覚的にとらえる方法である。児童福祉関係の施設においても、生活を共にすることで、同様の関係性が生じ、そのことが子どもたちの生活に色濃く影響を及ぼし、さらに、このような子どもたちに、職員が関わることで、さらに、関係性はよりダイナミックになっていくものと考えられる。これまで、ファミリー・マップは多く使用されてきているが、このようなレジデンシャル・マップも、今後もっと活用されるべきではないだろうか。また「レジデンシャル・マップ」という言葉そのものも、筆者の知る限り、福祉現場で使用されていることは皆無といってよいのではないだろうか。この機会に、児童福祉施設だけでなく、障害者施設、高齢者施設をはじめ、様々な福祉施設での活用が期待される。

以下に、表記方法を示す（図1）。

かなり良好な関係性（協力関係や信頼関係）	=
良好な関係性（協力関係や信頼関係）	—
わるくない関係性（協力関係や信頼関係）	……
強い信頼感、支援、好意感情	→
信頼感、支援、好意感情、サポート、支援、	……→
暴力や攻撃	^^^→

図1 レジデンシャル・マップの活用（表記方法）

好な関係性の数（＝）、良好な関係性の数（－）をそれぞれみたのが表2である。

表2 レジデンシャル・マップの分析表

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	合計
ギザギザの矢印の向かう先	4	0	3	0	0	1	1	2	3	0	4	1	19
ギザギザの矢印の出る数	2	2	0	0	1	3	4	2	3	2	0	0	19
かなり良好な矢印の向かう先	0	1	0	0	1	0	0	0	1	0	2	1	6
かなり良好な矢印の出る数	0	0	0	1	0	2	0	0	2	1	0	0	6
良好な矢印の向かう先	0	4	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	5
良好な矢印の出る数	1	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	1	5
かなり良好な関係性の数	1	1	1	1	0	0	1	2	0	3	1	1	12
良好な関係性の数	1	0	1	1	1	1	1	0	0	0	1	1	8
合計	9	8	5	3	4	9	8	6	9	6	8	5	
施設内以外の理由													
精神的不調	1	1	0	0	2	1	4	1	1	1	3	0	15
家族による面会	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	3
プラス													
マイナス	0	1	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	4
合計	2	2	0	1	3	2	4	2	2	1	3	0	22

プラスは、穏やかになる、落ち着くなどの肯定的な影響、マイナスは、面会后イライラするなどのマイナスの影響を意味する。

0（全く影響がない）1（やや影響がある）2（少し影響がある）3（まあまあ影響がある）4（かなり影響がある）までの5段階で、プラス面、マイナス面を表記

これをみると、ギザギザの矢印の向かう先が3つ以上になっているのが、A,C,Kとなっており、攻撃性の矛先として、十分な配慮が必要となる子である。さらに、F,G,Iは、ギザギザの矢印の出先の数が3つ以上となっており、いじめを引き起こしている事例と同様の配慮、攻撃性を向けなくてもよくなるにはどのような支援が必要か、ということが特に必要となる子どもたちである。

また、ギザギザの矢印の向かう先、及び出所と両方に矢印がある、A,F,G,H,Iは、攻撃性の連鎖が想定される子どもたちである。さらに、B,E,Jは、誰かから刺激を受けることなく、自分のほうから、攻撃性の発信源となっており、施設内以外の様々な理由（たとえば、実親との面会の後、精神的な不調になる場合、など）での攻撃性の源泉を想定しなければならないだろう（表2 参照）。被虐待事例などの、攻撃性の発信は、十分想定しなければならないことであろう。また、C,K,Lは、攻撃の矛先を向けられるばかりで、どこにも自分のほうから攻撃性を発信していない。攻撃のターゲット、あるいはいじめの固定化などを想定しなければならない子どもであろう。

（4）レジデンシャル・マップの活用について

これまでみてきたように、レジデンシャル・マップは、子どもたちの施設内での人間関係、あるいはおかれている生きづらさの状況を、理解する上でとても重要な機能を果たすと考えられる。このようなマップを同じ園舎内で仕事をしている職員が共有することで、より、行き届いた養育の場が保障されていくものとの考えられる。

4 職員に対する攻撃性

では、次にこれも深刻な問題となっている対職員への攻撃行動についてみていく。表3には、そのメカニズムを筆者が列記したものである。なお、これらは、表1同様、筆者の臨床経験に基づいて整理したものであるが、まだ仮説の域を出ておらず、今後、実証的な研究によって検証されなければならない。また、攻撃行動には、子ども自身の情緒不安定性など様々な要因があり、今後さらに検討しなければならない。

表3 職員に対する攻撃の可能性

(職員への攻撃)

1、DVの関係との類似性

攻撃—謝罪—蜜月—攻撃—謝罪—の繰り返し

2、暴力・攻撃によって得られる職員との関係

3、職員のほうの無力感、自己否定感

4、子どもの課題と職員の課題の混同

(職員は自分の問題を解決するために子どもを利用している可能性もある)

5、職員の人生脚本などを通して、自分の人生とこの仕事を見つめなおす機会の持ち越し

養育場面を通して、自分を見直す機会を回避している可能性

(1) DVの関係との類似性

攻撃を受けやすい職員と特定の職員に対して攻撃行動を表出しやすい子ども達との関係性を見ていると、DVの関係性との類似点を感じることがある。子どもは、この職員だったらゆるしてくれるだろうという、甘えが既にある。さらに、職員は、自分だからこそこのような表出になるだろうということで、ここで既に暴力への許容が始まっている。このことが、ますます、子どもの特定の職員への攻撃行動を誘発することにつながっている。

(2) 暴力・攻撃によって得られる職員との関係

また、攻撃や暴力によって得られる関係性は、「支配—被支配」というこれまでなじんできた関係性であり、キレルことで、子ども達は最もなじんだ世界へと、自分の生活の場を置き換え、その場の空気、雰囲気を一気に切り替えることが出来る。とても苦しく、また、自分自身が行きづらくなる空間でありながら、そこでの暮らしは、最も先が読め、なじんだ世界なのである。子どもがこれまでとは違う空間を感じ取り、おのずから攻撃性を出さなければならないには、職員との信頼関係の構築など様々な体験のし直しが必要となろう。

(3) 職員のほうの無力感、自己否定感

また、職員が、自分自身の様々なトラウマティックな体験や、愛着上の様々な課題を抱えることで、子どもと関わる中で無力感を感じ、この世界を自分では変えることが出来ないという自己否定感にさいなまれていることがある。このことが、子どもの側からの攻撃を受け続ける要因になることも考えられる。職員が、子どもと関わることで、変化を起こせないと感じてしまうのである。筆者は、職員のバーンアウト対策の面接の中でこの点を感じることもある。

(4) 子どもの課題と職員の課題の混同

子どものキレルきっかけや理由などが、職員のキレルところと同じだったり、あえて、職員のこだわっている価値観や養育観などや、大事にしている信念などに限って、破壊的に関わり、通常得られる自己高揚感と異なる特有の高揚感に浸ることを、職員が許容してしまっているかもしれない。万引き等に毅然と向き合えない職員は、万引き等を通して揺さぶられてしまうことがある。子ども達は、職員の弱いところを見つけ出すすべてを悲しいかな、施設での適応の中で身につけてきてしまっていることがある。

(5) 職員の人生脚本などを通して、自分の人生とこの仕事を見つめなおす機会の持ち越し

だからこそ、人生脚本（藤岡、2008）などを通して、職員自身が自分の生い立ちの中での、子どもとの関わりづらさと共通した課題を見出していく必要がある。また、このような機会を回避し、持ち越してしまうことで、事態が深刻化することもありうる。

5 子どもの攻撃行動への対処

(1) - 1 枠組みの不明瞭性への対処

では、どのように対処したらよいであろうか。ここで、愛着臨床アプローチ（Clinical Attachment Approach ; CAA）の観点が役立つと筆者は考えている。表4及び表5はその点を整理している。

①「柔順」と、服従の違いの理解の促進

子ども達の攻撃行動への対処として重要となってくるのが、攻撃性のコントロールそのものへの問題意識をしっかりと共有することである。周りが一生懸命になっても、子どものほうが、自分の問題行動や攻撃行動に対して、ひとごとのように関わっていると、問題の解決になかなかつながらない。ここでも問題の主体化ということが重要である。

子ども自身の問題の主体化（自分で解決すべき課題として受けとめ向かい合う）ことがまず大事である。職員の関わりは、そのために、今、そして、これからの自分のためにこのことを克服することが重要であることを伝えることになる。

そして、やっといういいこと、悪いことのルールの枠組みをきちっと提示していくわけであるが、この際も、誰がこの枠組みを提示するかが大きな鍵を握っている。ここで有効となるのが、藤岡（2008）も指摘している、柔順の概念である。ここでの、柔順は、服従とはちがう。服従

表4 子どもの攻撃行動への対処1

1 枠組みの不明瞭性への対処

①「柔順」と、服従の違いの理解の促進

誰によって提示されたルールなのか、を確かめる。

その提示者との信頼関係を構築する。

ルールの提示の仕方の中に信頼関係の構築（丁寧に説明する、など）が含まれている。

この枠組みの中で、（職員と子どもが）信頼関係の構築や衝動のコントロールへと一緒に向かっていく。

②（暴力や攻撃の）衝動のコントロールへの志向性

子どもにとっての課題—子ども自身が自分を変えようとしていること。

職員にとっての課題—このことに気付くこと、それが見えているか、いないかということ。

その過程で起きてくることへの対処こそが、養育の要点（プロセス志向）

—愛着の観点を通じた対処

例 ○○さん（職員）が悲しむから、絶対暴力をふるわない。

例 ○○さん（職員）のことが頭に浮かんで、攻撃が止まる。

は自分の意思に反して、誰かに従うことだが、ここでの柔順は、むしろ本人の意思で、養育者に任せてみるということである。そこには、「この人は自分には悪いようにはしないはずだし、自分のことを誠実に考えてくれている」という養育者への敬意と信頼がある。

一方で、服従は、力関係による一方的な支配であり、そこには虐待—被虐待、支配—被支配といったパワー・ゲームともいべき状況があり、そこには信頼は成立していない。自分が相手を利用できるか利用されているのか、のどちらかである。児童養護施設に入所している子どもたちの中で、「弱肉強食」という言葉を日常的に使われることがある。このような考え方が、育ちの中で繰り返し、子どもたちの心の中に入り込んでしまっている可能性がある。

安定した愛着を得た子どもは、子どもの養育者の規則、基準、期待を参考に基本となるような柔順を発達させていく。これは、親の価値を内在化させていくプロセスで起きてくると考えられ、道徳心と良心の発達へとつながる最初の段階である。愛着上の課題を抱える子どもたちには親のような存在による安定性愛着の文脈が十分有効に機能しないと考えられることから、子どもたちは、愛着対象（あるいは、養育者）に対する基本的な受け入れ（柔順）という発達が難しくなるだろう。結果的に、子どもたちは人間関係において支配的で、反抗的で「いばりたがり」で力の戦いの中になるようになる。これらの子どもたちが他者と折り合っていくことが極端に難しくなってしまうと考えられる。

②（暴力や攻撃の）衝動のコントロールへの志向性

これらを前提として、（暴力や攻撃の）衝動のコントロールへの志向性（子どもにとっての

課題)を職員が共有していく。職員からそれが見えていることが、職員自身の課題でもある。一緒にがんばってこうという志向性は、あきらめてしまうと、一気に支配-被支配関係が復活してしまう。すなわち、表1や表4で見てきたような様々な理由による攻撃性の表出が起こりうる。これらの点を配慮しながら、その過程で起きてくることへの対処こそが、養育の要点(プロセス志向)であろう。

例えば、攻撃行動を繰り返していたある子どもは、〇〇さん(職員)が悲しむから、絶対暴力をふるわない、といいながら、自分のなかでどうしようもなく存在していた攻撃行動への衝動を次第に調整していった。〇〇さんが怒るから調整するというのではなく、あくまでも、職員との深い共感を前提にした自己制御である。愛着上の課題を抱えた子ども達は、共感性が乏しいことがあるとも言われている。愛情深く関わってもらうことが少なかったことで、他者に対する思いやりを育てる機会を失ってしまったのである。相手のことを考えながら行動することを目標として、攻撃対象となる人(同居している子ども、職員)への共感性の向上、自分のことを心配してくれているということの実感、相手の感情への信頼の向上、さらには相手(職員や子ども など)への信頼を寄せることなどが大事となる。

これらは、日常生活の中で、親身な関わりを通しての愛着形成と、どんなことがあっても見捨てないという、危機状況だからこそその愛着形成が重要となる。そのことによって、攻撃性などへの感情のコントロール(〇〇さん(職員)が悲しむから、絶対暴力をふるわない。〇〇さんという愛着対象の構築)が可能となる。

あわせて、なかなか具体的な人物とこのような関係性がなかなか出来ない時であっても、施設全体とした愛着行動というのがあるのではないだろうか。施設への愛着の構築ともいべき観点である。例えば、この施設は、私(オレ)のことを決して見捨てない、というのが伝わっているからこそ、次第に特定の人との愛着関係が形成されていくこともあると考えられる。これまでの愛着についての考え方や概念は、人を愛着対象とすることに限定され、施設そのものや建物への愛着は、日常言語としての「愛着」には当然あるものの、ボウルビィ(Bowlby, J)らの考え方の中の「愛着」には盛り込まれていなかった。愛着行動がなかなか取れない子ども、愛着対象が不明確な子どもは、まずは、かすかなつながり、絆として、「施設への愛着」から始めるのではないかと筆者は考えている。これが、筆者が命名した、建物や施設、そして職員を含めた「愛着の器」ということである。

これらを前提として、職員の一貫した対応、施設の一貫した対応が、子どもの中での、職員や施設への「予測性」の向上を促し、それらの蓄積によって、次第に、特定の人物への愛着行動、そして、施設への愛着(施設のことを好き、この施設にいと安心する、いつでも帰ってきてよい施設と思えるようになる。何か大変なことがあっても、この施設は自分のことを決して見捨てない、など)を構築できるようになると考えられる。虐待を受けてきた子ども達にとって、虐待環境などの予測できない環境が、次第に、安心できる、予測できる環境へと変化することで子ども達は落ち着いていく。それらを踏まえ、以下に改めて述べるような、さらなる感情のコントロール、自分を大事にする「選択」の向上へとつながっていくと考えられる。「職員や施設は自分を決して見捨てない」、「自分たちは見捨てられない」、という予測が成り立つ

環境があることで、子ども達は、自己尊重や、自分を大事にするという方向へと進んでいくことになる。

(1) - 2 攻撃行動などの「自動化」への対処—選択—

適切な行動を選択するのに重要なのが、「帰結」という考え方である。帰結とは、安定した関係性の中で身についてくる「ことの成り行き」の感覚である。自分の行なった行動がどのような結果を招くのか、その一つひとつの選択の結果おとずれることについて丁寧に向き合っていく。衝動的に行動を起こし、人のことを叩くなど何かしてから、そのことのもたらす結果の重大さをわかってしまう。子どもたちは、見通しを持った行動を取れなくなると、行き当たりばったりの行動となり、その結果は、ますますわからないことになる。また、愛着上の課題があり、因果的なものの考え方ができない状況にあると、その筋道がかすかにわかっても、それを無視してしまう。物事をする前に、自分にとってネガティブな結果をもたらすほうを選択してしまう。愛着対象との安定した関係性の中で、ものごとの成り行きが、突然変化することなく進んでいくことを子ども達は体験していく。因果的なものの考え方は、このような関係性を前提として進んでいくという仮説は、まだ十分には検証されていないが、子どものものごとや世の中の認知に影響を与えると考えられる。

ものごとの最初の時に（例えば、イライラして、物や人に攻撃行動を起こそうとするときに）、選択の段階で、自分をよい方向へと導いてくれる選択肢を選んでいくように支援していくことが重要であるが、これが非常に困難であることが多い。子どもたちは、衝動性や短慮、攻撃性などを根底において、一回スイッチが入ると、そのままになってしまうことがある。どのようなスイッチが入るか、の見極めが周りの援助者は必要である。ここで、選択の際の主体性感覚の復活、醸成が重要となる。

すなわち、キレてしまって、後先考えずに、攻撃行動などをしてしまう子ども達は、キレた場合の行動パターンが自動的に動き出してしまうのである。スイッチが入る瞬間は、一種の解離が起きており、主体性が著しく希薄化（主体性感覚の希薄化）し、自分の意思に反して、（あたかも、多重人格者が、主人格の知らないところで、別人格に支配されてしまって、健忘を前提としたような想像を超えた行動をしてしまうように）自動的に行動が継起してしまうと考えられる。これが、自動化のメカニズムであり、フランスの心理学者ジャネは（Janet, P）、これを「自動症（オートマティスム）」と名づけた。

筆者は、『本人の主体性感覚の希薄化によって、自動的にある行動のスイッチがはいり、しかも、行動の流れとして継起していくことを、「自動化」と定義づけ、子ども達の行動を理解するうえで、きわめて重要な概念である』ことを提案したい。すでに、指摘したことではあるが、子ども達の攻撃行動などが誘発される場面では、本人の意思に反して、フラッシュバックのような、トラウマティックな体験の激しい感情を伴った再燃があり、これが、本人の主体性感覚への志向性を著しく阻害し、自動的に解離がおき、自動化された一連の攻撃行動が起きてしまうと考えられる。

ここで重要なのが、主体性感覚の希薄化によって、「自分」「おれ」という統合感がうまく作

動せず、解離状態となってしまうということである。このような統合感を、修復させるのが、先に見た、愛着対象との関係性、愛着対象とのつながりの実感である。愛着関係との関係のなかで、私（俺）は大事にされている、私（俺）はこんなことをしてはだめだ、と思いとどまることになる。支援の要点としては、子どものほうで、衝動的な行動などを踏みとどまったり、見通したりできるように導いていく。

このようなことを伝えるには、いくつかの方法があるだろう。①子どもの側に攻撃のスイッチが入ろうとするときに、「自分を大事にしよう」などと言ってあげて）一緒になってそれを切ることを提案したり、②そのスイッチが切れるまで、（その子や周りの子ども達の安全を確保しながら）しっかりと待ってあげることや、③攻撃性のスイッチが入ろうとしたら、自分の部屋に入って落ち着くことや、④深呼吸をして気持ちを静めるなどを見守りつつ、深呼吸を一緒にやっていくこと、などの工夫によって、スイッチが入りっぱなしになって、自動化が起きることを防ぐことが重要である。

そして、落ち着いたら、丁寧にそのプロセスを伝え、切れそうになったけれども調整しようとしたことや、もし調整がうまくいかなかったら、どのようになっていたかということ（ものごとの成り行き）を穏やかに丁寧に伝えることが重要である。それは繰り返し行っていく練習である。穏やかに伝えていくしかない。すでに述べたように、それを伝える文脈（心配しているから、ここでじっくり関わるといふ文脈）が伝わると、その内容やメッセージが伝わってくる。もし、養育者が怒りに任せてそのメッセージを伝えたり、丁寧に伝えようとしていても、その前の怒りの感情が尾を引いてしまっていたりすると、ネガティブな感情のほうが伝わって、メッセージの部分が遮断されてしまう。

さらに、難しいことに、職員が、しっかりと場面設定しようとしても、ぼーっとして、解離が起きて伝わらない状態にしてしまうことも起こりうる。かつての虐待環境や不適切な養育環境での、このようなメッセージを伝える場面が、たとえ同じような伝え方でなくても、その文脈でフラッシュバックのようによみがえってくる可能性がある。養育者の意に反して、解離を誘発する場面として子どもに受け取られてしまうのである。悲しいことに、聴く文脈になっていなく、子どもにとって、内容が聞こえなくなってしまうのである。同じ問題行動が繰り返されたり、こちらが真剣に関われば関わるほど、子どもとの関係が悪化したりする局面には、このようなことが起き、しかも、お互いに気づいていないということもある。しかし、だんだん安全な文脈が伝わってくると、それを基礎に内容が伝わるようになってくる。メッセージや内容はそれが伝わりやすい文脈が大事である。

子ども達は、自動化のスイッチが入ることで、結果として、子どもの側の周りとの「人間関係を切るスイッチ」となってしまう。そうではなく、自動化のスイッチを切ることで、人間関係のスイッチのほうを入れていく、すなわち「人間関係をつなぐスイッチ」が入るようにしていく。それでも、子どもの側で、人間関係を切ることによって、それ以上深い関係性をとらないですむような工夫をするということがある。そうした子どもには、関係をつなげる「選択」をすることで伝える。問題は、誰がそれを伝えるか、である。「スイッチがこう入ると、この人が喜んでくれる」と子どもが思うことが大事である。これまでのパターンとは違ったス

イッチを入れていく。

人はこれが絶対悪いと思っていることにかぎってやめない。子どもたちもいたずらしたり、動物の虐待をしたりするが、よい・悪いで生きているのではない。それをしなかったときにどういうよい体験をするのか。この点が大事であり、愛着の形成のタイミングこそ、そのプロセスにある。さらに、子どもへと言葉が入らないというのは、このような解離の可能性だけでなく、言葉そのものを受けとめていく準備が出来ていない可能性もある。からだ（こころ）が十分に安全に育まれていく中で、言葉は、単なる記号をいうことを超えて、からだ（こころ）へと沁みていく。「からだ（こころ）に沁みていく言葉」、これが重要と考えられる。この点は、滝川(2006)が指摘していることであり、非常に示唆に富む指摘である。人を操作する道具、攻撃や支配するための道具、言い訳や嘘でなんとかその場をしのごための道具、そのような言語の使用ばかりであれば、言葉とは大切なもの、こころに入れるべきものという感覚はなかなか育まれないだろう、と滝川は述べている。

（２）社会的養護の役割の提示

既に述べたように、施設にとって、子どもを守るということは、信頼関係構築そのものであり、上記に見てきたような職員を頼りにしながら、攻撃性、衝動性を克服するということにもつながる。そして、職員だけでなく、施設長はじめ、施設全体として、どのような態度で子どもと向き合うのか、ということがさらに重要であると考えられる。表5で見たような（暴力や攻撃の）衝動のコントロールへの志向性は、施設にとって課題でもある。すなわち、施設全体に対しての子どもの側からの予測性、施設全体と子どもが共有しようとする「攻撃性をコントロールしようとするという志向性」は、職員と子どもだけでなく、施設と子どもとの間でも極めて重要であると考えられる。

表5 子どもの攻撃行動への対処2

2 社会的養護の役割の提示

対応が困難な場合の措置変更

児童相談所の介入

見捨てられ不安を誘発しない配慮（信頼関係の構築）

社会的養護という枠組み

誰が、この枠組みを提示するのか

・・・施設長をはじめとする施設管理者の役割

（暴力や攻撃の）衝動のコントロールへの志向性（子どもにとっての課題）

それが見えていることが、施設長をはじめとする施設管理者の課題

その過程で起きてくることへの対処こそが、養育の要点（プロセス志向）

当然のこととして、社会的養護の役割の提示が重要な局面を迎える時がある。「もうこれ以上、

うちの施設では、「この子を抱え込んでおれない」、「別の児童養護施設か、一時保護所、あるいは、児童自立支援施設も考えなければならない」などの検討をしなければならないことになる。当然、そこには、児童相談所が関わってこなければならない問題である。また、学校や保健所、病院なども関わってくる問題である。施設長はじめ施設職員は、施設としての覚悟を決めなければならない点である。対応が困難な場合の措置変更をどう考えるのか、施設としては常にぎりぎりの選択をしながら、子どもの攻撃行動への対処をしなければならない。攻撃行動や、暴力の早期発見は、子どもの人権擁護としてとても重要なことであるが、その後の対処も、大きな意味で、子どもの人権をどう保障するか、ということのそのものの議論となる。措置変更という文脈の中での、児童相談所の介入も想定しなければならない。この際、児童相談所の対応も含めて、見捨てられ不安を誘発しない配慮（信頼関係の構築）を十分にしなければならない。子ども間の暴力行動への対処は、一緒に暮らす子どもの人権擁護の視点も重要であり、施設は常にそのことを意識しなければならない状況にあるといっても過言ではないだろう。

措置変更も含めての社会的養護という枠組みの提示が必要となるときもあるが、誰が、この枠組みを提示するのか。施設長なのか、事務局長なのか、園舎の寮長や主任なのか、あるいは児童相談所の児童福祉司なのか、施設長をはじめとする施設管理者の役割が問われる瞬間である。「あなたがここにいるのは、社会的養護の仕組みの中で、行われており、その（付託された）責任をわれわれは持っている」、「われわれは、決してあなたのことを見捨てない、自分たちのできる限りのことをしようと考えている」など、一言一言が、子どもに重くのしかかるが、そのような文脈でこそ、子どもの「攻撃性などへのコントロールの志向性」が高まるということがある。一職員、あるいは一園舎の限界性を、施設長はじめ施設職員は、重々考えておかなければならない。

また、既に述べたように、（暴力や攻撃の）衝動のコントロールへの志向性（子どもにとっての課題）は、ここでも再度重要となると考えられる。一人の愛着対象との関係性の中ではなかなかうまく行かなかった衝動や攻撃性のコントロールが、もう一回、このような（施設全体をあげた）信頼関係の中でこそ、高まると考えられる。子ども達は、本気になって、リアリティを持って、自分の抱えている課題を何とかしようと考え始めるのである。そのような志向性の中でこそ、子どもは、施設側の覚悟や愛情を前提とした「愛着の器」をリアリティのあるものとして受けとめ、これからの人生を少しでも自分らしく生きていくために、再度、（自分の攻撃性や破壊性への対処という）目標に向かっていくと考えられる。そのような子どもとの志向性の過程がしっかりと見えていることが、施設長をはじめとする施設管理者の課題となる。そして、紆余曲折、失敗、危機場面など、その過程で起きてくることへの対処こそが、養育の要点（プロセス志向）であり、子どもの統合感や主体性感覚を高める道筋になると考えられる。様々なことがあったとしても、それを関わり の 接点、あるいは、関わり の きっかけとして肯定的にとらえることで、少しずつ、子どもとの関係性が構築されていくものと考えられる。

6 今後の検討課題

(1) 養育中の解離と「意識の変性状態」との関係性

表1で見たように、子どもの攻撃行動を職員や里親、実親が誘発することもある。職員や里親の側の課題を見直すことが重要である。子育て中起きていることは、従来、むしろ虐待を受けた子ども達についていわれていたことが、職員や、里親実父母でも同様のことが起きている可能性があることを示唆したのは、M・メイン (Main,M.) たちの行った養育者のFR行動に関する研究であった。

「おびえたような/おびえさせるような行動」(FR行動)とは、どのような行動であろうか。メインとヘッセ (Main,M. &Hesse,E.) (1996) は、6つのFR行動のサブスケールをつくりだしている。以下、アブラムズら (Abrams,K.Y. et al) (2006) を参考にしながら、FR行動について触れていくが、筆者が注目しているのは、その中の特に、解離的傾向の部分である。FR行動は、①おびやかす(脅威的行動)②おびやかされる(おびえを示す行動)③解離的行動④おどおどした、あるいは、(過度に、子どもに対して)うやうやしい行動⑤親密さが度を越えた、ロマンティックな行動⑥無秩序な行動、と6つに分類される。その中で、③解離的行動について詳しく見てみる。定義は、「意識の変性状態 (an altered state of consciousness) に入っていく可能性がある入口の様々な徴候」となっている。この意識の変性状態は、まさに、催眠のトランス状態を意味しており、トラウマと解離との関係性に、愛着形成の局面が大きく関わっていることを示唆している。育児中に、何らかのきっかけで、心的外傷体験が思い出されたりして、感情的なフラッシュバックが起これ、急激な変化へとつながった可能性がある。

筆者が注目しているのは、子育て中の母親や、児童福祉施設における職員も容易にスイッチが入る、さらには、里親などにおいても、子育て場面での様々な刺激が、それぞれの養育者の過去のトラウマティックな体験を再燃させたり、あるいは、養育の繰り返しの中で、容易にトランス状態に入るようなサインになっている可能性があるのではないかと考えている(図3)。

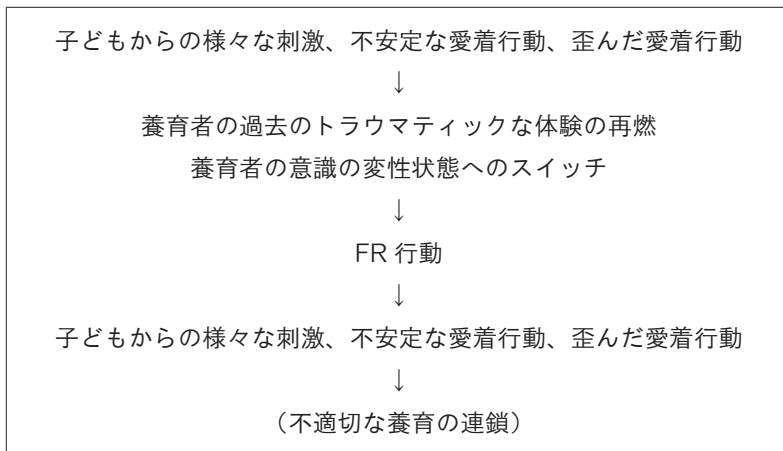


図3 養育中の解離と「意識の変性状態」との関係性

例えば、子どもの泣き声や表情（一生懸命子どもに関わっているときに、自分のことをばかにしたようにニヤッと笑った、等）などが、意識の変性のスイッチになっているのではないだろうか。ちょうど、催眠の練習を繰り返していると、簡単なサイン（手をポンとたたく、等）で、被催眠者は、容易に催眠状態に入ることができるようになるのと同じではないだろうか。これは、メインたちが触れているような子育て中の意識の変性状態の可能性をさらに推し進めた考え方として、今後さらに検討することが必要と考えられる。

まさに、基礎研究と臨床との接点であり、今後、このような指標を活用した研究がさらに展開することが期待される。施設職員、里親、実親などのFR行動や養育行動を理解し、その後のサポートに結びつけていく上においてもこのような具体的な視点は大きい活用されるべきであろう。

（２）解離と統合

既に述べてきたように、解離と統合という概念は、子どもたちの行動の理解に重要な役割を果たす。支援をとらえなおす上で、解離の対置概念として、「統合」概念が重要である。愛着が形成され、安定した世界観、自己感、他者感がはぐくまれてくると、体の動き、ものの考え方、感じ方も一つの統一されたまとまりを得てくる。これが、「統合感」であり、子どもたちの成長と共に、ますます強固で、かつ環境に対して柔軟に変化応対できるものになってくると思われる。統合感の希薄化が解離を助長するならば、その統合感（（自分を見失わない、自分らしくしておれる、自分を大事にできている、などの感覚）を保持するのが、（養育者との関係性の中で自己像や他者像、世界観などを構築するという）特定の愛着対象との安定した愛着であろう。虐待による解離には、この統合感を低下させてしまう愛着の絆の希薄化が原因であることが想定される。

愛着形成への恐れや混乱が、職員一子ども関係でも生じることを考慮した介入をすべきである。バン・デア・ハートら（van der Hart, Onno et al）（2006）は、このような混乱や戸惑いが生じている場合には、職員（里親）の考えや行動が予想できるような状態（predictability, 予測可能性:安定した面接構造）を提示し続け、さらに、職員が役に立つ存在であること（availability, 有用性、利用可能性）を提示し続けることが大事であると指摘している。このような点は、ベリンゲン（Biringen,Z）.(2000)も、養育者の情緒的利用可能性（emotional availability）として、その重要性を指摘している。安定した愛着関係が成立することで、あるいは、安定した愛着行動を愛着対象へと向けることが出来る力を育てることで、『日常的な「統合感」とは異なる次元の、より深い体験を踏まえた「統合感」が出現し、ニュートラルな原点に立ち返って、外傷性記憶や意識下固定観念への対応が動き始めるということ』これこそが愛着臨床が果たす子ども虐待への対処ではないだろうか。

特に、なかなか愛着関係を形成することが難しい子どもたちは、人への愛着の前に、まず、施設への愛着を形成させている可能性がある。すなわち、「施設への愛着」から「人への愛着」へという考え方が、無差別的愛着行動を示したり、ゆがんだ愛着対象しか持ちえない子どもたちへの対処では重要になると考えられる。人間関係へとつながっていかない、無差別的愛着行

動を取る子ども達に対しては、まずは、施設への愛着を持ってもらうことが大事ではないだろうか。筆者が、「愛着の器」と表現しているのは、人だけでなく、空間や時間、場所の雰囲気などを含んでいる。愛着を臨床的にとらえなおす場合に、むしろ、日本語の愛着や英語のATTACHMENTがもっている他の意味（土地や物への愛着）が含まれているのは、不思議な言葉の縁（えにし）と考えるしかない。これらが、次第に統合され、ゆるやかであっても、まとまりを持ってくることで、子どもたちは次第に安定してくると考えられる。

（3）愛着と解離、自動化について

これまで、「自動化」という言葉を使ってきたが、未だ十分に吟味されていない概念である。自動化の持っている意味を検討することは、今後の子ども達への対処を大きく前進させるものとする。この考え方を、トラウマやトラウマへの対処、人間の不適応行動との関連で検討したのは、ジャネ（P.Janet）であった（藤岡 2006b）。ジャネの理論との関連性をさらに検討しなければならない。キレル、あるいは、攻撃性を自動的に出現させ、持続させてしまうのではなく、別の、自己制御のスイッチが入らなければならない。

この点は、まだ、臨床的に確認する作業が必要であるが、フラッシュバックを起こしやすい人は、自分の方から、心地よいトランス状態へと入っていくのも得意である。この点に主体性感覚が機能しているかどうかで、本人を脅かすトラウマ体験の再燃なのか、それらを癒す心地よい体験なのかという道筋が決まってくると考えられる。自己制御のスイッチが入ると（あるいは、安定した統合感が保てている状態では）、そこで主体性感覚が浮き上がり、愛着対象との関係性の中で、自己をコントロールしていける可能性は、今後、職員や里親などの日常的な子ども支援を考える上で、重要な概念になるであろう。その意味でも、統合のもつ意味は極めて重要である。統合感の度合いによって、フラッシュバックは自動化されているように思える。攻撃性や暴力との関連性、トラウマと攻撃性の関係性は、さらに検討しなければならない課題である。このような点を、整理したのが、図4である。

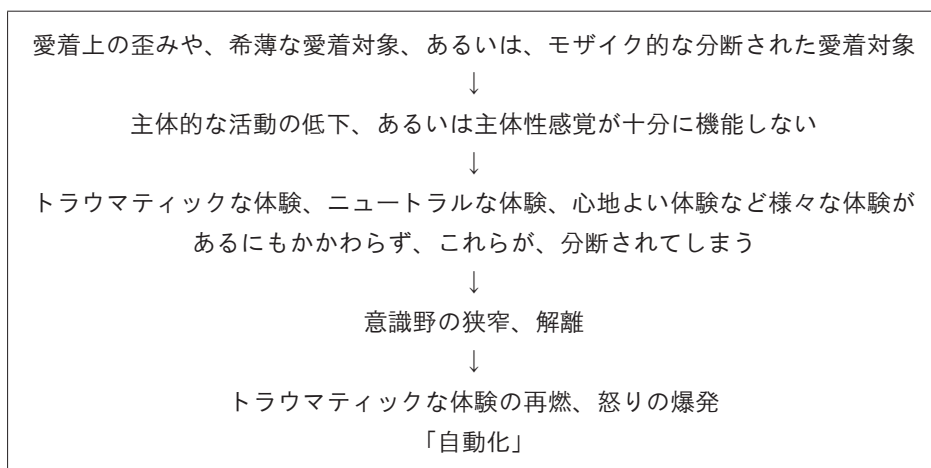


図4 攻撃行動の「自動化」のメカニズム

図4でみるように、愛着上の歪みや、希薄な愛着対象、あるいは、モザイク的な分断された愛着対象しか、もちえないことによって、主体的な活動が低下し、あるいは主体性感覚が十分に機能せず、解離がおきてしまうと考えられる。トラウマティックな体験、ニュートラルな体験、心地よい体験など様々な体験があるにもかかわらず、これらが、分断され、これまで見てきたような様々なきっかけ（いろいろ、自分の思うようにならないこと、など）で、ジャネのいう意識野の狭窄が起き、トラウマティックな体験の再燃や、怒りの爆発へと、「自動化」が始まってしまうと考えられる。

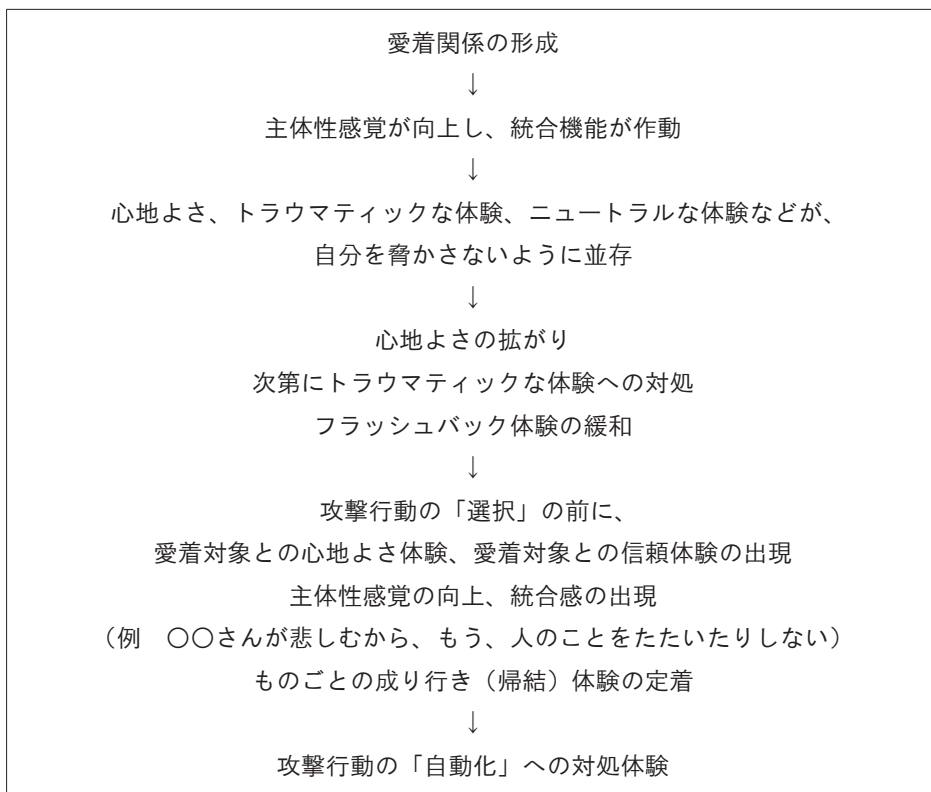


図5 攻撃行動の「自動化」への対処のメカニズム

それに対して、図5でみるように、愛着対象との関係性において、攻撃行動をコントロールできたり、自分を取り戻す作業ができてきている子どもたちは、愛着関係を基礎において、主体性感覚が向上し、統合機能が作動し、統合的なニュートラルな状態を構築できるものと考えられる。そこには、心地よさ、トラウマティックな体験、ニュートラルな体験などが、自分を脅かさないように並存し、さらに、心地よさが広がることで、次第にトラウマティックな体験への対処につながっていくものと考えられる。さらに、図5の中にあるように、帰結の獲得過程を援助者と共有することで、愛着形成がさらに深化していく。道筋は、情動的な保障の場があってこそ獲得されていくものと考えられる。最初は、なかなか帰結が伝わらず、同じ問題行

動が起きてしまっても、繰り返し、帰結の獲得過程を共有することで、次第に、この人と一緒に感じたり、考えたりすると自分の中に生きる力が身についていくことを実感できるようになっていく。その見通しや予測性が他者との間で共有される時に、「信じる」（信頼）という情動へと結実していく。

7 おわりに

ここで取り上げてきた議論は、愛着対象の存在が、攻撃行動をいかに制御するのか、ということの理論仮説であり、「自動化」という概念を基礎において論じてきたが、今後さらに実証的に検証していかなければならないと考える。また、虐待を受けた子どもたちへの対処の中で、トラウマティックな体験に触れざるを得ないのが、トラウマワークではあるが、むしろ、このトラウマワークそのものが、子どもたちの統合感を低くしたり、主体性感覚を希薄化させる可能性もあることも十分留意しなければならないだろう。むしろ、心地よさを共有する愛着対象との関係を基礎において、トラウマへの対処が始まるということも重要である。実際、トラウマティックな側面の未解決が攻撃行動の引き金になっていることがあり、これらの側面と、本論文で論じてきた対処との関連性は、未だ十分に論じていない。これらの点が、日常の養育の中でどのように出現し、どのような対処されていくものなのか、不明な点もある。今後、この点もさらに議論、検討していくことが必要と考えられる。

引用・参考文献

- Abrams, K.Y., Rifkin, A.& Hesse, F. 2006 Examining the role of parental frightened/frightening subtypes in predicting disorganized attachment within a brief observational procedure. *Development and Psychopathology*, 18, 345-361.
- Biringen, Z. 2000 Emotional availability: Conceptualization and research findings. *American Journal of Orthopsychiatry*, 70, 104-114.
- Fujioka, T. 2005 The Clinical Approaches by Pierre Janet. *Janetian Studies*. Vol. 2. Homepage of Institut Pierre Janet (Paris).
- 藤岡孝志 2006a 愛着障害と修復的愛着療法 乳幼児医学・心理学研究 第15巻第1号 23-40.
- 藤岡孝志 2006b 「解離」概念の再評価ーピエール・ジャネの臨床的アプローチを通してー 精神医療 No.44. 18-29.
- 藤岡孝志 2006c 虐待と愛着障害ー修復的愛着療法ー そだちの科学 No.7 (特集 愛着ときずな) 日本評論社 107-112.
- 藤岡孝志 2008 愛着臨床と子ども虐待 ミネルヴァ書房
- 藤岡孝志 2009 レジデンシャル・マップの活用 福島県社会福祉協議会研修会「被虐待児の愛着修復及び援助者支援プログラムについて」(2009.1.20)
- Janet, P. 1923 *LA MÉDECINE PSYCHOLOGIQUE* First print: Paris, Flammarion (松本雅彦訳 心

理学的医学 みすず書房 1981)

Janet, P. 1889 *L'automatisme psychologique*. Paris: Felix Alcan.

Reprint: La Société Pierre Janet, Paris, 1973.

Janet, P. 1909 *LES NÉVROSES* Paris, Flammarion. —高橋 徹訳 神経症 医学書院 1974

Janet, P. 1925. *Psychological Healing*, vols 1, 2. New York, Macmillan. (original publication: *Les médicaments psychologiques*, vols 1-3. Paris, Felix Alcan, 1919).

Juffer, F., Bakermans-Kranenburg, M.J.&van IJzendoorn,M.H. 2007 *Promoting Positive Parenting-Attachment-Based Intervention*-Lawrence Erlbaum Associates,Taylor&Francis Group.; New York.

Levy, T. M. & M. Orlans 1998 *Attachment, Trauma, and Healing-Understanding and Treating Attachment Disorder in Children and Families-*. Child Welfare League of America, Inc.; Washington. (藤岡孝志+A T H研究会訳 愛着障害と修復的愛着療法—児童虐待への対応— ミネルヴァ書房 2005)

Main, M., & E. Hesse 1996 *Disorganized and disorientation in infancy Strange Situation behavior. Phenotypic resemblance to dissociative states*. In I.Michelson and W. Ray (Eds.) *Handbook of dissociation: theoretical, empirical, and clinical perspectives*. New York, Plenum Press, 107-138.

Orlans, M. & Levy, T. M. 2006 *Healing Parents-Helping Wounded Children Learn to Trust & Love*. Child Welfare League of America, Inc.; Washington.

滝川一廣 2006 愛着の障害とそのケア そだちの科学 No.7 (特集 愛着ときずな) 11-17.

van der Hart, Onno , Ellert R.S.& Kathy Steele 2006 *The Haunted Self; Structural Dissociation and the Treatment of Chronic Traumatization*. W.W. Norton & Company; New York/London.

van IJzendoorn, M.H. &Bakermans-Kranenburg, M.J. 2003 *Attachment Disorders and disorganized attachment: Similar and different.. Attachment and Human Development*, 5, 313-320.